

J. A. コメニウス著『ATRIUM [広間]』の
修辞の技法・優美文法に関する考察A Study of Ars Ornatoria・Grammatica elegans
in ATRIUM (The Hall) by J.A.Comenius (Komenský)

松岡 弘

要旨

コメニウスの著した『広間』Atrium は、『前庭』Vestibulum（第一学年用）、『扉』Janua（第二学年用）とからなる三位一体のラテン語教科書の、上級第三学年用教科書であり、修辞・レトリックの文法と本文 100 章から構成されている。本論では、その技法の種類と作例、および『扉』およびその書き換え版である『広間』本文の一部をラテン語原文から訳出した。また、それらと西欧における修辞・レトリックの伝統、並びにコメニウスの師アルシュテッド（J.H.Alsted）との関連にふれつつ、『広間』の中の「修辞の技法」別名「優美文法」が、『広間』本文と同様に独創性に富み、また、現代の第二言語教育にも示唆するものがあることを述べた。

キーワード：Comenius、Alsted、Atrium、修辞・レトリック、ラテン語教科書

0 はじめに

筆者は、すでに松岡（2014）（2015）でヤン・アモス・コメンスキー〔Jan Amos Komenský（1592-1670）、ラテン語名 Comenius。以下これに従う〕のラテン語教科書：総合タイトル「学校教育」（Eruditionis scholasticae pars I・III）の、初級段階の『前庭』Vestibulum、そして中級段階の『扉』Janua について、原版、改訂版、および内容・形態等の変更されたその他の版を取り上げて、それらの形態等を報告し意義を論じてきた。本稿は、『扉』に続く上級段階用ラテン語教科書『広間』ATRIUM を取り上げ、考察する。

『広間』の本文については、松岡（2013）で成立時期と場所、形態と内容の特徴、全 100 章のタイトル、作成理念と使用目的を述べ、その一部を『扉』本文と対比して訳出した。今回は、そこでは考察が及ばなかった部分、『広間』本文の前におかれた「修辞の技法」と 9 種の優美文体への書き換え例を、考察の主たる対象とする。

なお、筆者は 2013 年 9 月から 2014 年 1 月まで、ドイツ国ハレ市にあるハレ・ヴィッテンベルク・マルチン・ルター大学の日本学研究所で日本語教育に従事する機会があり、この期間に同大学図書館並びに同市の فرانケ財団歴史図書館で本稿の対象となるコメニウス並びにアルシュテッド著作の原版に接し、一部を筆写することができた。本稿の調査内容は、多くはファクシミリ復刻版 ODO（次節参照）で読むことが可能であるが、当時

いかなる体裁で実物が刊行されたかを知るためにも、前稿(2014)(2015)の形式に倣い(今回は一部簡略化した。①～④の番号を付したものの)、最初に原版に関する報告をする。

1 『広間』 ATRIUM の諸版

『広間』本文プラスその他を収めた著作は以下の3点である。1. 書名(完全な書名は、引用・参考文献欄で示した)、2. 刊行年・刊行場所、3. 紙型・分量、4. 全体の構成

① 『教授学全集』(略称 ODO) 第3部に収められているもの

1. *OPERA DIDACTICA OMNIA Tomus II* (『教授学全集第II巻』)

IX. Eruditionis Scholasticae pars III, ATRIUM, Rerum & LL. ornamenta exhibens.

(9章. 学校教育. 第3部、事物と言語の装飾を示す「広間」)

2. 1657年、アムステルダム。ファクシミリ復刻版・1957年、プラハ。

3. 31cm×21cm、厚さ I 3.5 cm、II 4.5 cm 文法・本文のページは2段組。

4. 『広間』文法部と本文は8章に所収。文法部ノンブル 454-554、本文 555-718。

② 『広間』と『扉』の合冊版[松岡(2015)で〈1659年シャフハウゼン版〉と名付けた]

1. *Eruditionis Scholasticae ATRIUM, Rerum & Linguarum Ornamenta exhibens*

(学校教育:事物と言語の装飾を示す「広間」)

2. 1659年、ニュルンベルク。原版はフランケ財団歴史図書館所蔵。

3. 17×10cm、厚さ 5cm 総頁数 839 頁。

4. 前半『広間』部 520 頁、関連論文 50 頁。後半『扉』本文 253 頁、関連挿絵 16 枚

③ 『扉』と『広間』の本文が並列に配置された版

1. *JANUA, Rerum et linguarum structuram. Itémque ATRIUM (parallelé positedum),*

Rerum Et Linguarum Ornamenta exhibens. (学校教育:事物と言語の構造を示す「扉」と事物と言語の装飾を示す「広間」〈並列に配置〉)

2. 1661年チューリヒ。原版はチェコ国プシェロフのコメニウス博物館、ウヘルスキ・ブロトの J.A. コメニウス研究所所蔵。

3. 16×9.3cm、厚さ 4cm、608 頁。

4. 序論・解説等(80 頁)のあと、左頁『扉』本文、右頁『広間』本文の各章毎対照併記

(左右頁合わせてのノンブル表示。実質 528 頁)

④ 5 節で表示する

2 『広間』の内容と意義(まとめ)

『広間』本文については、旧稿(2013)で『扉』と『広間』各 20 章「人間」を翻訳し、『広間』の意義を述べた。まとめると、『広間』本文 100 章の見出しと通し番号の付いた

計 1,000 の文・文章は『扉』の内容と一致する、違いは、百科事典のように全ての分野の語彙が網羅された事物教材的な『扉』の文章が、『広間』では、借りた衣装をまとうように多様な名称・表現に変えて示される、『広間』の文章は、語句・文章・表現の言い換えや比喩・レトリックによって優美に飾られたもので、これは西洋の修辞法の伝統の上に位置づけられる、「事実描写」から「比喩表現」にきりかえ、「言葉を飾る」や「言い換えて優美にする」ことは、単なる表現の美化・多様化ではなく、表現内容の明確化でもある、こうした発想は日本語教育にはなかったが、『扉』の事実と『広間』の装飾は両方が備わってこそその言語教育であり、「飾らない表現」と「飾られた表現」のどちらにも真実が存在する、それを、コメニウスは文学作品でなく言語教育教材で試み貫徹した、ということである。

本稿の課題は、旧稿（2013）では触れられなかった変換の具体的手順、すなわち「飾らない表現」はいかにして「飾られた表現」に変身するか、を知ることである。コメニウスはその方法、すなわち「修辞の技法」別名「優美文法」を詳細に記述し、本文の前に置いているので、次節でその一部を取り上げ、考察する。翻訳にあたっては前節①の ODO 所収の『広間』に従った。①と②の文法部「修辞の技法」と本文には表記の違いが散見されたが、基本的に同一である。③では「修辞の技法」は簡略化されている。ドイツ語・日本語等への外国語翻訳版はない。

3 「修辞の語法 Ars Ornatoria」別名「優美文法 Grammatica elegans」の内容

コメニウスは、『広間』本文提示に先立つ部分で、1 章から 12 章にかけてラテン語の修辞・レトリックの技法を項目に分ち詳細に記述した。（本稿での「修辞・レトリック」とは、一般にレトリック、修辞、比喩、文のあや、等で意図されるもの全般を含む。日本で刊行される類書のタイトルには多く「レトリック」が用いられているが、各種用語を厳密に区分し使い分けるのは筆者には難しく生産的でもないので、「修辞・レトリック」とする。伝統的には、佐藤（1978）で述べられているように、ローマ以来のレトリック 5 分科（1 発想、2 配置、3 修辞、4 記憶、5 発表）のうちの「3 修辞」に該当する¹⁾。

第 1 章は「優美文法」の概説である。冒頭の 1～3 のみを訳出する。

- 1 優美文法とは、優美に話す技法である。
- 2 優美に話すとは、談話の本来の規則が求めるのとは別に、精神の感性をもって話すこと、これにより、自然に導かれて談話をし、理解される場合よりも、より一層心地よく理解されることである。[同一は倦怠の母、多様は楽しみ]
- 3 技法に基づき優美に話すとは、談話を飾る方式を常時、持っていることである。そして、何故に何がどのように変化されるべきか、分別ができることである。（以下略）

¹ 佐藤信夫（1978）『レトリック感覚』p.32-37

こうした短く明快な定義・解説を積み重ねながら、コメニウスは修辞の技法を9種に分ける。Iは他の8種の基本・出発点となるもので、彼はそれを、明晰(Perspicuitas)、叙述(Expositio)、透明(Clarificatio)などで表す。IIはラテン語固有(Idiotismus)、IIIは語順変化(Transpositio)、IVは構造変化(Transmutatio)、Vは事物変換(Transnominatio)、VIは拡大(Dilatatio)、VIIは縮小(Contractio)、VIIIはフィギュール²(比喩など)(Figura)、IXは詩文、リズム・韻律(Versificatio, Ligatura)である。これらをピラミッド型の系統一覧図で示し、種類別に詳細な解説と例文を加える。それは、語(Vox)、句(Phrasis)、文(Sententia)、文章(Periodus)、演説・物語(Oratio)の各レベルで行なわれる。

ここでは、冒頭の第1章でコメニウスが試みた、同一内容文の9種の書き換え例文を示し、修辞の技法に基づいて優美に話す(表現する)ことの実例をみる。

I Perspicuitas (明晰であること)

Magister meus docet exemplis perpetuis. 私の先生は不変の範例を通して教える。

Magister だけでは意味が多様になるので、**Magister studiorum meorum** (私の学問の指導者、または **ludimagister** (教師)、**praeceptor** (教師) と変更できる。)

II Transpositio (語順変化)

Studiorum Magister meorum perpetuis docet exemplis.

(文中の語句の位置が入れ替わるだけで、これはラテン語の特性である。筆者注)

III Transmutatio (構造変化)

Magistro meo solemne est docere per exempla perpetua.

不変の範例を通して教えることは、私の先生にとって常のことである。

(文法構造が変わり、主格名詞が与格に、奪格名詞が対格になっている。筆者注)

IV Idiotismus (ラテン語固有)

Studiorum Magister meorum の代わりに、ラテン語風に **Meus a studiis**

(私の学問の先生) と言うことができる。

V Transnominatio (事物変換)

Mei nutritor ingenii praemansos nobis ingerit cibos.

私の才能を育てる人は、私たちに買いおかれた食料を流し込む。

VI Dilatio (必要以上に拡大する)

Meminit dilectus meus Praeceptor, cuius est res bonas docere, ejusdem esse, exemplo praeire, &. 私の親愛なる教師は、範例とともに前進することが、よきことを教えることの課題であることを忘れない。

VII Contractio (必要以上に縮小する)

Meus facienda docet faciendo. 先生はなすべきことを行為を通して教える。

² 佐藤(1978)は「ことばのあや」としているが、様々な訳がある。p.38-43

VIII Figura (フィギュール、ことばのあや、比喩など)

O Sapientem morem, facienda docere faciendo ! Non dicam quam suave sit, exemplis doceri. Dic, an methodus docendi dari queat melior, mollior, efficacior, atque dum exemplis docemur & ducimur, etc. おお、行為を通してなすべきことを教えることは何と賢明な習慣か！範例を通して教わることが何と心地よいかを私は言いたくない。言ってくれ、私たちが範例で教えられ導かれるよりも、より優れ、より心地よく、より有効な教授法が提示され得るのかを。

IX Ligatura (詩文、リズム・韻律のフィギュール)

Gnavum habemus Studiorum ducem, 私たちは学問の勤勉な先導者をもつ。
Ominibus affundit Exemplorum Lucem. 彼はすべてのものに範例の光を注ぐ。

この後、コメニウスは「修辞の技法」9種について詳細に解説をし、例を示す。それは、上述の意図的になされたものとは異なり、ほぼ古典からの引用である。

4 『扉』の文体の「優美文体」8種への変換

修辞の技法を詳細に解説し例を示した後、コメニウスは「事物の描写をより一層優美な文体で示すラテン語の広間」の副題の下に、『扉』第1章項目番号1から14までの文章を8種の文体に書き換える。但し、I「明晰な優美文体」は『扉』と同一で、IX「詩文体」は解説があるだけで書き換え例文はない。以下では項目番号1と、2の前半部だけを訳して示した。原文に当たらなければ各文体の違いは明確には見えてこないが、できるだけ直訳し特徴がわかるように訳し分けた。

I 明晰な優美文体＝『扉』の文体

- 1 親しい読者よ。ようこそ。
- 2 君は問う、学識とは何かと。私は答える、事物の相違を知っていること、そして、事物をそれぞれその本来の名称で明示できることだと。

II 語順変化による優美文体

- 1 ようこそ、親しい読者よ。
- 2 学識とは何かと君が問うならば、それぞれ一つ一つをその名前で明示できることだと、私は答えるだろう。

III 構造変化による優美文体

- 1 お元気ですか、私の読者。
- 2 学識とは一体何かを探求したい人に対し、私は解答を与えよう。事物の違いに無知でないことと、それぞれをその名称で明示できることだ。

IV ラテン語固有の優美文体

- 1 君にあいさつする、アナグノスタ（「読者」の意）よ。

- 2 もし、学識によって何がどのように可能であるかを私に尋ねることが用件であれば、言葉で説明しよう。それは事物を事物から知性をもって識別し、真正の名称で区分できることである。

V 事物変換による優美文体、アレゴリー文体

- 1 君に真心より挨拶をおくる。愛すべき学芸の愛好者よ。
- 2 その君が狩に興ずるがごとく、文芸の最高の優美を追いかけるならば、私が、それを提供しよう。それは、事物を事物に最奥の思慮を介して対置することでそれぞれの名称がお互いの間で同一のものとして入れ替わる。その結果、あることを言って、別のあることが理解されるのだ。

VI 表現の拡大による優美文体（アジア的文体）

- 1 この私の本を読もうとしてここにいる君に、それがだれであろうと、最大の挨拶を捧げる。
- 2 「学識」と私たちが呼ぶところのそれは何を指しどんなものなのか、どなたか訊ねたいのか。ならば、以下のこと以上に、より適切な答えはないだろう。すなわち、事物がどれほど多くの類に分かれ広がっていても、その確実な違いを通して知る事物の知識であり、および、それぞれを母語自体の名前で呼ぶことに習熟していることだと言う以外には。

VII 表現の縮小による優美文体

- 1 ようこそ。
- 2 学識とは何かと君は問うのか。それは、要するに事物に関する言葉の知識だ。

VIII フィギュール・比喻による優美文体

- 1 おお、ようこそようこそ。再び舞台に舞い戻った事物の熱心な歴訪者たる君よ。
- 2 優美さを求めて努力している君は、お願いをもって再び近づいてきたと私は想像する。何が説明されるべきか。君が私に言葉の優美さの全てを教えただろうか、それとも何か残っているのだろうか。私はそれを知りたいことを求める。フィギュールで談話を彩ることをまだ教えていないね。つまり談話は自然のままか、変えられているかだ。それは、語句の置き換えか事物の取り替えによってか、アジア風に散漫か、ラコニア風に簡潔かのどちらかだ。同一のものを組み合わせにより、より強力なものに向けて準備する、そのことを君に教えよう。

IX 詩文体、リズム・韻律のフィギュール

『扉』本文を詩文体に変換した例文は示されていない。

このような8種の文体例の後、『広間』第1章「開始」(Ingressio)の冒頭のラテン語本文は次のように表現されている。部分部分に諸文体の特徴をみることができる。

- 1 君に挨拶をおくる。この本を読もうとしてここにいる君に。
- 2 優美な学識とは何かを君が私から聞きたいのだね。答えを与えよう。

事物を事物に美しく対置して、それぞれの本来の名称を優美な名称と交換できることだ、どの言語であれその分に応じて。

以上、ほんの一例を示したに過ぎないが、コメニウスが修辞の技法に従って緻密かつ意図的に『広間』の文章を練り上げていったことがわかるのではなかろうか。

5 コメニウスの「修辞・レトリック」の独創性とアルシュテッドとの関連

「修辞の技法」9種の文体の中で特に下位分類が施され、説明が詳細なのは、V.事物変換文体とVIII.フィギュール文体である。そこに挙げられている項目は以下の通りで、これらはギリシャ以来の西欧のレトリック・修辞の伝統に沿って論じられ、その名が登場する。V.の「事物変換」は、ここでは *Tropus* となっていて、日本語で「転義」あるいは「比喻」とよばれてきたものである。

V. で解説されるもの：*Adagium* ことわざ、*Allegoria* 風諭、*Parabola* 寓言、*Hyperbole* 誇張、*Metaphor* 隠喩、*Ironia* 反語、*Synecdoche* 提喩、*Metonymia* 換喩、*Epitheton* 付加形容詞、*Gnoma* 格言、*Apopthegma* 格言、*Paradoxum* 未決、*Apologus* 教訓話、*Fabula* 寓話

VIII. で解説されるもの：*Interrogatio* 設問法、*Exclamatio* 感嘆、*Parrhesia* 無遠慮、*Retentia* 黙説、*Revocatio* 反復、*Concessio* 譲歩論法、*Permissio* 仮承服、*Apostrophe* (*Aversio*) 転訴、*Prosopopoeia* 擬人法、*Deliberatio* (*Addulatio*) 検討形 (ためらい)、*Communicatio* 暗示設問法、*Praeoccupatio* 予防論法、*Paranomasia* 暗示引用、*Polyptoton* 屈折反復、*Epizeuxis* 連続反復、*Epanalepsis* 非連続反復、*Epanodos* 変容回帰、*Anadiplosis* 末語語頭同一、*Anaphora* 頭語反復、*Epistrophe* 末語反復、*Symploce* 語合成、*Climax* 漸層³

これをみると、コメニウスの「修辞の技法」がアリストテレス以来の西欧の修辞・レトリックの伝統の枠組みを忠実に受け継いでいることがわかる。佐藤他の『レトリック事典』も文例は日本語作品からとられているものの、枠組みは西欧的である。また、ローマ時代の修辞・レトリックの集大成とされるクインティリアヌスの『弁論術』*ORATORIA* では、*Tropus* と *Figura* が詳細に記述されている⁴が、コメニウスの「修辞の技法」における系統だった分類と簡潔な解説、それに続く各種の書き換え例文、そして最後に『扉』本文すべての『広間』本文への書き換えと言った形態はとらず、コメニウスとは大きく異なる。また、『レトリック事典』に限らず、修辞・レトリック関連の著作にあるのは、多くは文学作品からの引用例であり、それらの解釈と分類であるが、コメニウスの『広間』が示したの

³ 日本語訳は、ほぼ佐藤・佐々木・松尾 (2006) 『レトリック事典』に拠った。

⁴ *The Institutio Oratoria of Quintilian* Book VIII, IX

は、そうした文・文章がいかんして生み出されるか、の手順であり模範例であった。果たしてこのような、つまりは外国語の学習者を念頭に編纂された修辞・レトリックの教科書が他にあるのだろうか。もし、それがコメニウスの創案でないとしたら、彼が参考モデルとしたようなものがあつたのだろうか。筆者には関連文献を全て渉猟するだけの力はないから、それを確認することはできない。ただ、筆者はドイツ滞在中の図書館で、コメニウスのヘルボルン時代の師であるアルシュテッドの初期作品『弁論家』*ORATOR* に少し目を通すことができたので、それに触れておこう。

これは初版刊行年が1612年、刊行地がヘルボルンであることから考えて、1611年から1613年にかけて当地に留学していたコメニウスが師より直接与えられ、目にしたことは想像に難くない⁵。この『弁論家』には、コメニウスが取り上げた修辞の技法の名称がほぼ同じように掲げられ、一つ一つに簡潔な解説と定義が加えられている。そして後にコメニウスが行なったように、主要なフィギュールがピラミッド型に関連図表化されている。これも憶測の域を越えないが、まず定義し、簡潔な解説を加え、さらに類型化して相互関連一覧表にまとめあげるのは師直伝のものであろう。参考までに、『弁論家』第4章「雄弁の方法」(*Methodus Eloquentiae*)、その第16節「雄弁ないしは装飾について」(*De Elocutione sive Exornatione*)で掲げられた「語法のフィギュール」(*de figuris dictionis*)は、*Epizeuxis*、*Anadiplosis*、*Climax*、*Anaphora*、*Epistorophe*、*Symploce*、*Epanalepsis*、*Epanodos*、*Paronomasia*(類音語接近)、*Polyptoton*の10種で、「文のフィギュール」(*Figura sententia*)は、*Exclamatio*、*Licentia*、*Correctio*、*Aposiopesis*(黙説)、*Apostrophe*、*Prosopopoeia*、*Addubitio*(ためらい)、*Communicatio*、*Occupatio*(暗示黙過)、*Concessio*の10種である。コメニウスにない用語(和訳を添えた分)も含まれるが、共通する部分をほぼカバーし、両者は近接関係にあるといえよう。ただ、コメニウスの『広間』にある「修辞の技法」と「文体言い換え例」は記されていない。

参考までに、アルシュテッド著『弁論術』*ORATOR* 原版は下記の通りである。

④ ヨハン・ハインリヒ・アルシュテッドの著作『弁論術』

1. 書名 *JOHAN-HENRICH ALSTEDI ORATOR: Sex libris informatus: IN QVORUM
I Praecognita II Oratoria communis III Epistolica IV Methodus Eloquentiae
V Critica VI Rhetorica Ecclesiastica*
2. 刊行年 1616年(第3版、初版は1612年)、刊行地ヘルボルン、ドイツ。
3. 紙型・分量 13×8cm、厚さ6cm。*ORATOR*の部は309頁。

⁵ 当時ヘルボルンでは毎週、レトリック、討論術、詩文の練習が課されていて、入学1年弱のコメニウスが提出した論文は、レトリックの使命とは、内容を正確に伝えることか、または説得的に、なのかという倫理的問題であつたという。Blekstad (1969)、p.33-34

4. 全体の構成 原版は6種の著作を合冊製本したもので、総頁数1,160頁。

(表紙は60度までしか開かず、書写には困難が伴った。)

6 おわりに：第二言語教育の中の「修辞・レトリック」に向けて

最後に『広間』本文であるが、松岡(2013)では「第20章：人間」全文を『扉』に對置させて訳出した。また、『扉』および『広間』の72章は「レトリックと修辞」の表題をもち、本稿の内容そのものであるが、そこには前節で挙げたフィギュールの代表的なものが羅列され、簡単な説明があるだけで、「飾られた文」「優美な文体」とはなっていない。「レトリックと修辞」をさらに修辞するということは、さすがのコメニウスもやめたのであろう。一方、93章「王国の争乱と戦争」は、コメニウスの生きた、そして見た世界そのものであったからであろう、『扉』の文章も熱がこもり、感情あふるものであるが、『広間』はそれに輪をかけて、レトリック・比喩が用いられている。その一部を下に訳出する。

『扉』915 わが民族の恥、そして世界の破滅たるこれら戦争が、どうか廢語となってくれればと願う。この世に、戦争の暴威が及ばない、それほど神聖で、侵し難く、気高く、高価あるいは莫大、無比あるいは堅固なものは、そして、戦争の暴威が冒瀆し、挫き、碎き、覆し、踏み潰し、焼き払い、根絶やしにし、そして抹殺しないものは、どこにも存在しない。(以下略)

『広間』915 平和の神よ、あなたは、戦争と武器が廢れた名称となるべく、それを誰よりもおできになる方ではないのですか。おお、消えてもらいたい、もう一度言う、どうか消えてくれ、戦争よ。かの途方もない怪物、角があり、牙があり、嘴があり、蹄がある、凶暴かつ無益そのものの戦争！これがその角で突き上げ、その歯で噛み砕き、その嘴でほじくり、そして、その蹄でえぐり踏みにじることをしない、それほど高く優美、それほど神聖あるいは崇高なものがあるのか、それはない。(以下略)

本稿で扱ったことは、実は日本語教育とも関係が深い。文体の切り替え・書き換えと言ったことは、卑近な例では「です・ます体」から「普通体」への変換として、教師も学習者も規則に従って実践しているからであり、口語体と文章体の使い分けも同様である。

だが一方、実用本位の語学学習において「飾らない」文を「飾る」文に代える必要があるのか、という疑問も当然あるだろう。これについては、修辞・レトリックの技法を使わなければ、心の真実は明確に伝わらない場合があるという事実を指摘しておこう。ハレにおける授業でのささやかな経験であるが、国際政治学者の書いた東日本大震災に関する文章⁶を一緒に読むうちに、一人の学生が何度も「これは比喩ですか」「これも比喩ですね」を連

⁶ 宮原彬編著『留学生のための時代を読み解く上級日本語』(2012)の中の坂本義和「人間のおごり」(『世界』2011年5月号掲載論文)

発したことを思い出す。それがいかにも比喩的な表現からごく平凡な慣用句にまでおよび、全文ほとんど修辞・レトリックと感じさせられるまでになった。冷静な社会学者が物する文章であっても、深刻な事態とそれに対する心情を正確に表現するには、「飾る文」がその役を担うことを感じさせられた。従ってコメニウスが試みたように、その技法と模範例を教科書の中に組み込み、順序だって指導することは、母語教育では自然にまかせるものとしても、第二言語教育では意識的に学ぶことが必要なのではないだろうか。また、「優美な文」は書けずとも「優美な文」を正しく理解させる授業は、第二言語教育においてこそ求められるのではないか。驚くべきことに、400年も前に、コメニウスによって、それは完璧な形で行なわれていたのであった (了)

謝辞

第3節に引用したラテン語文の拙訳は、ドイツ語に直して翻訳の適否をウィーン大学スラブ学研究所チェコ語科教授ネヴェクラ教授 (Prof.Dr.Stefan Michael Newerkla, Institut für Slavistik der Universität Wien) に確認し、誤り・不備を指摘していただいた。記して謝意を表したい。コメニウスおよびアルシュテッドの著作原版は、ハレ大学図書館ならびにフランク財団歴史図書館で長期間にわたって閲覧の機会を得た。ハレ大学日本学研究所で仕事をする幸運に恵まれたことが懐かしく思い出される。

Zusammenfassung und Dankesworte

In dieser Abhandlung mit dem Titel “Comenius’ ATRIUM (Der Saal) als Sprach-lehrbuch – Betrachtung der Bedeutung von Rhetorik für das Erlernen von Fremdsprachen” – habe ich mich damit beschäftigt, den Inhalt von Ars Ornatoria oder auch Grammatica elegans in Eruditionis Scholasticae Pars III “ATRIUM” von Jan Amos Komenský (J.A.Comenius) zu analysieren, ausgewählte Teile ins Japanische zu übersetzen und Richtlinien aus der Rhetoriklehre von Comenius für den gegenwärtigen Fremdsprachunterricht abzuleiten.

Der europäische Kulturkreis hat eine lange Tradition mit weitreichendem Einfluß in der Rhetoriklehre. Auch ATRIUM (Grammatik und Text) von Comenius ist Bestandteil dieser Tradition, die bis in die Zeit des antiken Griechenlands zurückreicht. Ich halte ATRIUM von Comenius für ein herausragend bedeutungsvolles Werk der Rhetoriklehre, weil es präzise und ausführlich die Stufen des Prozesses aufzeigt, geschmückte und elegante Ausdrücke zu produzieren oder sachlich präsentierte Sätze in einen gefühlvollen Stil umzuwandeln.

Ich möchte diese Gelegenheit auch wahrnehmen, um Herrn Prof.Dr.Stefan Michael Newerkla vom Institut für Slavistik der Universität Wien meinen herzlichen Dank aussprechen. Professor Newerklas Änderungsvorschläge zu den von meiner Person

angefertigten Übersetzungen (Gegenüberstellung von Lateinischen und Japanischen Ausdrücken) waren eine große Hilfe. Ohne seine Unterstützung, Ermutigung und unsere langjährige Freundschaft würde ich meine Beschäftigung mit Comenius bereits längst aufgegeben haben.

Ich möchte hier auch über mein schönes Glück berichten, dass ich im Jahr 2013 Originaldrucke, und zwar ATRIUM (1659) von J.A.Comenius in der historischen Bibliothek von der Franckeschen Stiftungen und ORATOR (1616) von J.H.Alsted in der Bibliothek von Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg, lesen und daraus Notizen anfertigen konnte, während ich in Halle ein halbes Jahr als Sprachlehrer für Japanisch tätig war. Die Erinnerung an Halle, Bibliotheken der Stadt sowie Comenius und Alsted bleiben in meinem Herzen Teil eines geschlossenen Bandes.

(Nicht zuletzt vielen Dank, an Herrn Kollegen Dr. Christian Heideck ! Sie haben damals für mich mit Bibliothekarinnen der halleschen Bibliotheken Verbindung aufgenommen und auch diese deutsche Zusammenfassung korrekturgelesen !)

引用文献・参考文献

〈コメニウス・一次資料〉

J.A.Comenius (1659), JOHANN.AMOS COMENII ERUDITIONIS SCHLASTICAE ATRIUM, *Rerum & Linguarum Ornamenta exhibens; Una cum ejiusdem FORTIO REDIVIVO, Sive De pollenda Scholis Ignavia, Et Utilissimus Vitae Regulis. Editio secunda, recognita & á mendis purgata.* Noriberg (Nürnberg), in Collection of Historische Bibliothek von Franckeschen Stiftungen, Halle/Saale, Germany

J.A.Comenius (1661), JOH.AMOS COMENII ERUDITIONIS SCHOLASTICAE JANUA, *RERUM ET LINGUARUM STRUCTURAM: Itemque ATRIUM (parallelé positedum), RERUM ET LINGUARUM ORNAMENTA exhibens.* Tiguri (Zürich), in Collection of Muzeum J.A.Komenského v Přerově & Muzeum J.A.Komenského v Uherském Brodě, Czech Republic

J.A.Comenius (1656), LATINAE LINGVAE JANUA RESERATA. *Rerum & Linguarum structuram exhibens ordine native, (ad leges Methode Linguarum novissimae. THE GATE OF THE LATINAE TONGUE UNLOCKED. Exhibiting in a natural order the structure of Things, and of the Latine Tongue, (according to the Rules of the newest Method of Tongues.),* London. In Collection of Muzeum J.A.Komenského v Přerově

Comenius, Joannes Amos(1657, 1957), OPERA DIDACTICA OMNIA TOMUS I (PARS I-II), TOMUS II (PARS III-IV). Prag: Academia scientiarum bohemoslovenica

Komenský (Comenius), Jan Amos, OPERA OMNIA J.A.K.15-IV (2011), Praha: Academia

Červenka, Jaromír (ed.) (1959), *JOHANNIS A. COMENII JANUA LINGUARUM RESERATA*, Praha: Statní Pedagogické Nakladatelství

〈アルシュテッド・一次資料〉

J.H.Alsted (1616), *JOHAN-HENRICI ALSTEDI ORATOR, Sex libris informatus: IN QVORUM I. Praecognita II Oratoria communis III Epistolica IV Methodus Eloquentiae V Critica VI Rhetorica Ecclesiastica*, EDITIO TERTIA, Herborn, in Collection of Universitäts-Landesbibliothek Sachsen-Anhalt, Halle/Saale, Germany

J.H.Alsted (1626), *JOHANNIS-HENRICHI ALSTEDII COMPENSIUM PHILOSOPPHICUM, Methodum, Definitiones, Canones, Distinctiones, & Quaestiones, per universam philosophiam*, Herborn, in Collection of Universitäts-Landesbibliothek Sachsen-Anhalt, Halle/Saale, Germany

〈引用・参考文献〉

Blekastad, Milada (1969), *COMENIUS Versuch eines Umrisses von Leben, Werk und Schicksal des JAN AMOS KOMENSKÝ*, Academia Praha

Čapková, Dagmar (2007), *OPERA DIDACTICA OMNIA J.A.KOMENSKÉHO*, Praha-Prerov

Hiller, Richard (1883), *Latein-Methode des J.A.Comenius*, Zschopau:Verlag von F.Raschke

J.Klein, J.Kramer (ed.) (1988), J.H.Alsted, *Herborns calvinistische Theologie und Wissenschaft im Spiegel der englischen Kulturreform des frühen 17.Jahrhunderts*, Frankfurt am Main:Verlag Peter Lang

Liese, Ernst (1904), *Die neueste Sprachenmethode (methodus linguarum novissima des J.A.Comenius)*, Neuwied a.Rh.und Leipzig: Heusers Verlag.

Lippert, Max (1863), *Johann Heinrich Alstedts pädagogisch-didaktische Reform – Bestrebungen und ihr Einfluß auf Johann Amos Comenius*, Leipzig.

Störkel, Rüdiger (2008), COMENIUS UND HERBORN, in *Studien zu Comenius und zur Comenius-rezeption in Deutschland*, STUDIA COMENIANA ET HISTORICA 38, Muzeum J.A.Komenského Uherský Brod, Czech Republic

THE INSTITUTO ORATORIA OF QUINTILIAN with an English Translation by H.E.BUTTLE (1920-22), volume 3, Book VIII, IX, London

佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚—ことばは新しい世界をつくる』 講談社

佐藤信夫 (1981) 『レトリック認識—ことばは新しい視点をひらく』 講談社

佐藤信夫・佐々木健一・松尾大 (2006) 『レトリック事典』 大修館書店

世界古典文学全集 16 『アリストテレス』 (1966)、「弁論術第三巻」 筑摩書房

J.A.コメニウス著『ATRIUM [広間]』の
修辞の技法・優美文法に関する考察

松岡弘 (2013) 「J.A.コメニウス著『ATRIUM [広間]』の内容と意義—第二言語教育における上級学年用教科書の姿—」『日本語と日本語教育・第41号』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター

松岡弘 (2014) 「J.A.コメニウス原著『Vestibulum [前庭]』について—初級段階・第二言語教科書の構成と変容—」『一橋大学国際教育センター紀要第5号』一橋大学国際教育センター

松岡弘 (2015) 「J.A.コメニウス著『Janua [扉]』の初版・改訂版について—その形態と構成の観点からの考察—」『一橋大学国際センター紀要第6号』一橋大学国際教育センター

[追記]

この拙い小論を、2016年5月24日、御国プラハにおいて九十の天寿を全うし旅立たれた、ダグマール・チャプコヴァー博士 (Prof.PhDr.Dagmar Čapková, DrSc.,) に捧げます。

(博士の訃報を知らされたのは入稿直前でしたので、このような追記の形となりました)

チャプコヴァー先生は、コメニウス研究の世界的権威であり、最高峰に位置する方でした。私は先生の御逝去に対し心より哀悼の意を表すとともに、同時に、先生がその御著作、御講演、個人的な助言を通して、J.A.コメニウスの言語教育に関する多くの知識と重要な原則を私に教えてくださったことを深く感謝いたします。(以下のチェコ語への翻訳文は、私の長年の友である、チェコ国プシェロフ市コメニウス博物館研究員の手を煩わせました)

Tento krátký článek je věnován památce profesorky dr. Dagmar Čapkové, která nás opustila 24. května 2016 ve věku 90 let.

Profesorka Čapková byla vynikající, světově nejvýznamnější komenioložka. Chtěl bych vyjádřit svou upřímnou lítost nad jejím odchodem a vděčnost za to, že mi prostřednictvím svých publikací, přednášek a osobních rad poskytla mnoho vědomostí a osvětlila významné principy jazykové výuky J. A. Komenského.

(translated into Czech by the courtesy of the staff of Muzeum Komenského, Přerov)

(まつおか ひろし 商学研究科 MBA コース担当講師)